2012 年　6 月 30 日・「図書新聞」では

詩の言葉で現実と内在的に関わること

詩的言語の問題に格闘してきた詩人たちの痕跡を現代に活かす

芳賀章内 詩論集『詩的言語の現在』　　佐相憲一

戦後詩の生き証人であり、すぐれた現代詩人である芳賀章内氏は同時に、鋭い複眼をもつ詩評論家である。これは一研究本というにとどまらず、戦前戦後の現実を再認識させ、詩的言語の問題に格闘してきた詩人たちの痕跡を現代に活かす切実な書である。

芳賀章内氏の詩論のすぐれたところは、過去の詩文学遺産を流派にとらわれずに広範にしかも突っ込んで読み解き、人間が詩の言葉でいかに現実と内在的に関わっていくかを今日的に考える角度と交錯させているところであろう。その際に、哲学の次元の探究が含まれているのも特長だ。

氏にとって特別の先人が詩人・北川冬彦（一九〇〇～一九九〇年）である。芳賀氏は、北川冬彦が戦後詩のひとつの総合方向として実践した詩誌「時間」の同人であった。本書で繰り返し述べられているように、それは戦前の詩界を象徴する二つの潮流、すなわち、新しい表現形式の追求をしながらも時代現実の内容を軽視した日本モダニズム詩の流れと、新しい時代現実と果敢に闘いながらも表現手法を軽視した日本プロレタリア詩の流れの、双方のいいところを吸収しつつも止揚して、戦後の新しい時代現実にふさわしい「新現実主義（ネオリアリズム）」を新たな内在性・主体性で実践するものだった。本書には、実際に共にその場にいた者ならではの明晰な代弁性ももちながら、あくまで客観的な説得力で、この北川冬彦を中心とした詩運動の遺産が戦前戦後を貫いて刻印されている。すぐれて先駆的な北川冬彦らの詩的実践であったが、北川のその後の詩壇における「事件」ゆえに、現在では本質的全体像は広くは知られていない。この本の重要な価値のひとつである。

また、シュルレアリスムの成果も随所に論じられている。これもそこにべったりと他の潮流を攻撃するために利用するのではなく、一方ではリアリズムを新しい次元に発展させる手法として、他方ではモダニズムの今日的な継承をも視野に入れる論調で、それらが同じ土俵の上の、現実と個の関わりあいの詩言語という本筋において論じられている。

芳賀氏の論じ方は、「広い」ということと「鋭い」ということが矛盾しない。詩文学の本筋というところから偏見なくさまざまな潮流の詩の鑑賞ができる、類まれな論客なのである。主観的すぎる一面的な批評が跋扈している現代詩界において、芳賀氏のこの批評のあり方は大いに学ぶべきであろう。

たとえば、詩作品にとって「心（意味内容）」と「言葉」とどちらが大事か、という二つの傾向のそれぞれの代表選手として、古典文学の藤原定家と本居宣長の言が紹介されているが、意表をつく的確なその選択自体が心にくいばかりであるし、双方ともにうなずかせる弁証法は、詩文学の可能性をひろげてくれる。

「列島」や「荒地」の詩人たちも論じられており、ほかにも金芝河から西脇順三郎まで、石垣りんから斎藤忠まで、原民喜から吉岡実まで、壺井繁治から古事記まで、現役詩人たちを含めて多彩である。宗左近、鳴海英吉などへの論考は人間的な親しみも感じさせる。

さらに、芳賀氏が主宰してきた詩誌「鮫」の連載「鮫の座」論考も見逃せない。一九八〇年代、九〇年代、二〇〇〇年代の世相や時代の流れも記しながら、詩のあり方をさぐる、貴重な記録である。さまざまな角度からの考察が、時代の動きとの関連で述べられていて、侵略戦争・植民地支配などの歴史風化が危険な風潮のもとでの本書の価値も高い。

社会の中で生きながら、長いものにまかれない個の徹底した本質凝視が、詩表現の独自のあり方の問題と結びついているという芳賀氏の視点は、いまますます重要であろう。（詩人・批評家）

と紹介されています。